

この欄では、各号の特集に関する資料や多摩地域の基礎資料を掲げて、その解説を行います。ご意見またはご希望がありましたら、お知らせください。

特別企画

第14回 「たまり場がほしい」の願いが映し出しているもの

今月号で紹介した三多摩健康友の会の「暮らしのアンケート」の活動は、調査活動と実際の相談活動などをつなぐ、たいへんすぐれたものです。そこで今回のこの欄では、特別企画として、アンケートのうちの「友の会の活動への期待」についての回答結果をもとに、高齢者に関する東京都の資料などを参考にしながら、高齢者の「生活要求」について考えてみることにしました。

(今号の羽田邦雄氏の報告＝「羽田報告」とあわせてお読みください。)

右ページの表Aは、アンケートの中の「健康友の会への期待」についての60歳以上の人たちの回答結果を、「総数」と「性別」に分け、さらに友の会の支部別に区分けして見たものです。理解しやすいように、要望項目を「総数」における回答数の順位にしてあります。表Bは、表Aを分析するために構成比(%)にしたものです。

●アンケートの各要望項目の意味は次の通りです。

たまり場＝気兼ねなく使えるたまり場、安全確認＝安全確認のための戸別訪問、医療送迎＝医療機関への送迎、健康講座＝健康づくり講座、配食＝配食サービス、相談窓口＝暮らしの相談窓口、趣味講座＝趣味の講座、

実際のアンケートでは、これらの項目以外に、買物代行、子どもの就学援助、子育て企画の項目がありました。回答者が少数であることから、この表では「その他」に集めてあります。

※a 結果の分析の前に、頭に入れておきたいことがあります。質問では、期待する項目の中から「1つだけ」を選ぶことになっています。この方法で得た回答には、回答者の切実な願い(これだけは実現してほしい)が込められているということができます。しかし問題もあります。というのは「たまり場がほしい」と答えた人の中に「趣味の講座」もしてほしい、と思っている人がいるかもしれませんし、さらにその他の願いもあるかもしれません。(それらを考えて「3つまで選んでください」というような聞き方をする方法があります)。ですから、今回の方法による回答結果を読むときには、回答者が少ない項目についても軽視す

ることは避けなければならないでしょう。

※b 統計理論の基礎知識からいうと、母数字(調査の土台になる集団の大きさ。今回の場合には健康友の会の会員数)が10000以上の場合、回答者総数が570以上ぐらいいから精度の高い調査結果(信頼度95%)が得られたと考え、100未満においては信頼度が低いものとみなされます。今回のデータも、そうしたことを考慮して、(性別・支部別のように)回答者数の総数が100未満の回答については「参考値」として扱うことを原則にします。

◆第1位は「たまり場がほしい」だった

ここからは、A・B二つの表を使って、調査の結果を読んでいきます。

要望の第1位は「会員が気兼ねなく使えるたまり場がほしい」でした。「総数」の実数では89人が要望し、構成比では17.9%を占めて第2位の安全確認(59人・11.9%)を大きく離しています。「男性総数」でも「女性総数」でも第1位ですが、特に女性では19.2%です。これは何を意味するのでしょうか。

ここで求められている「気兼ねなく使えるたまり場」とは、おしゃべりをしたり、歌を歌ったり、時には軽い体操をしたり、学習会ができた、会食をしたり、というような多目的の社交場とでもいうようなもの、いわば地域の「ふれあいの場」のことでしょう。

表C 奥多摩地域市町村の人口密度と老年人口比<2011.1.1>

市町村別	人口(人)	面積(km ²)	人口密度(km ² 当)	老年人口比(%)
羽村市	56050	9.91	5656	19.7
瑞穂町	33661	16.83	200	20.6
青梅市	138412	103.26	1340	21.9
あきる野市	81249	73.34	1108	23.4
日の出町	16460	28.08	586	27.5
奥多摩町	6190	225.63	27	41.1
檜原村	2683	105.42	25	42.3

人口・老年人口比は東京都「住民基本台帳人口」

面積は国土地理院の資料による。

人口密度と老年人口比の端数は四捨五入した。

市町村名は老年人口比に比例して掲載してある。

●表A 三多摩健康友の会への期待<実数>

人

総数 性別 支部別	要望別(回答者数順位による)									
	総数	たまり場	安全確認	医療送迎	健康講座	配食	相談窓口	趣味講座	その他	無回答
総数	496	89	59	51	47	33	28	25	26	138
立川	124	16	15	8	10	6	8	3	5	53
国立	139	25	19	18	11	12	8	8	11	27
昭島	111	19	13	16	10	8	4	7	4	30
青梅奥多摩	122	29	12	9	16	7	8	7	6	28
男性総数	142	21	19	14	10	6	12	6	6	48
立川	49	6	6	1	3	2	5	—	3	23
国立	21	3	4	4	2	—	2	1	1	4
昭島	34	4	4	6	2	2	2	3	—	11
青梅奥多摩	38	8	5	3	3	2	3	2	2	10
女性総数	354	68	40	37	37	27	16	19	20	90
立川	75	10	9	7	7	4	3	3	2	30
国立	118	22	15	14	9	12	6	7	10	23
昭島	77	15	9	10	8	6	2	4	4	19
青梅奥多摩	84	21	7	6	13	5	5	5	4	18

●表B 三多摩健康友の会への期待<構成比>

%

総数 性別 支部別	要望別(回答者数順位による)									
	総数	たまり場	安全確認	医療送迎	健康講座	配食	相談窓口	趣味講座	その他	無回答
総数	100.0	17.9	11.9	10.3	9.5	6.7	5.6	5.0	5.2	27.8
立川	100.0	12.9	12.0	6.5	8.1	4.8	5.5	5.5	4.0	42.7
国立	100.0	18.0	13.7	13.0	7.9	8.6	5.8	5.8	7.9	19.4
昭島	100.0	17.1	11.7	14.4	9.0	7.2	3.6	6.3	3.6	27.0
青梅奥多摩	100.0	23.8	9.8	7.4	13.1	5.7	6.6	5.7	4.9	23.0
男性総数	100.0	14.8	13.4	9.9	7.0	4.2	8.5	4.2	4.2	33.8
立川	100.0	12.2	12.2	2.0	6.1	4.1	10.2	—	6.1	46.9
国立	100.0	14.3	19.1	19.1	9.5	—	9.5	4.8	4.8	19.1
昭島	100.0	11.8	11.8	17.7	5.9	5.9	5.9	8.8	—	32.3
青梅奥多摩	100.0	21.1	13.2	7.9	7.9	5.3	7.9	5.3	5.3	26.3
女性総数	100.0	19.2	11.3	4.0	4.0	7.6	4.5	5.4	5.7	25.4
立川	100.0	13.3	12.0	9.3	9.3	5.3	4.0	4.0	2.7	40.0
国立	100.0	18.6	12.7	11.9	7.6	10.1	5.1	5.9	8.5	19.5
昭島	100.0	19.5	11.7	13.0	10.4	7.8	2.6	5.2	5.2	24.7
青梅奥多摩	100.0	25.0	8.3	7.1	15.5	6.0	6.0	6.0	4.8	21.4

三多摩健康友の会「暮らしのアンケート・会の活動への期待」の調査結果による。

要望別の「その他」には、「買物代行」「子どもの就学援助」「子育て企画」「その他の要望」を含んでいる。表Bの%の端数は四捨五入。

そこで特に注目したいのは、青梅奥多摩支部の結果です。支部の総数で23.8%が、また参考値とはいえ女性で25.0%が「たまり場」を要望しており、約4分の1が求めていることになります。これを少し掘り下げた考えてみることにします。

表Cは、2011年1月における青梅市・奥多摩町に隣接する奥多摩地域7市町村の人口・面積・人口密度・老年人口比を見たもので、市町村の掲載順位は、老年人口比によっています。

この表から次のことが分かります。

①自治体ごとの人口・面積・人口密度に大きな差があります。

②青梅市以下で見ると、人口密度が小さくなるにつれて老年人口比が高くなっています。

③奥多摩町・檜原村は、人口密度・老年人口比について他の市町村とは大きな差があります。

これらを考慮して青梅奥多摩支部の「たまり場」についての要望の高さを見ると、いわゆる「過疎化現象」が広がり、高齢者人口の割合が急激に上昇しているところ、気兼ねのない地域社会の人間関係をつくりたい、といっていることが理解することができます。(さらに、こうした地域の場合「できるだけ近くにたまり場」がほしい、ということを含んでいるかもしれません。)

もちろん「たまり場」は、都市化した地域の課題としても重要であり、都市地域の支部の回答でも要望のトップです。その背景には、人間関係の希薄化が伝えられるなかでの1人暮らし老人世帯、高齢者だけの世帯の増加があるものと思われます。

表Dは、東京都による多摩26市域の高齢者人口と独居老人数の予測ですが、2020年～2005年の間に高齢者人口が1.6倍近くになるのに対し、独居老人

表D 多摩26市の高齢者人口と高齢者独居人口の予測<2005—2025>

		2005	2010	2015	2020
人	実数	705934	871167	1021872	1112673
	指数	100.0	123.4	144.8	157.6
独居	実数	14075	16702	25684	29618
	指数	100.0	118.7	182.5	210.4

東京都統計局 2005年は国勢調査結果、その他は推計値。指数の端数は四捨五入してある。

は2.1倍になると予測されています。「たまり場」を求める声はさらに広がっていくものと思われます。

◆第2位は「安全確認のための戸別訪問」だった

要望の第2位は「安全確認のための戸別訪問」で、「総数」で59人・11.9%、各支部の総数で10%前後を占めていますが、立川で12.0%、国立で13.7%であるが目立ちます。

「羽田報告」の中で、立川圏域の友の会が訪問や電話による安否確認を行ったところ「もう死のうと思って、夫とともに食事を絶った」という70歳代の女性の例が報告されていますが、「安全確認」の重要性を示す衝撃的な事例です。

◆第3位は「医療機関への送迎」への願い

要望の第3位は「医療機関への送迎」で、「総数」で51人(10.3%)が求めており、第2位との差はわずかででした。医療機関への送迎を望む原因については、「足腰が弱っている」、「タクシー代がない」、「医療機関が遠い」などがあるものと思われますが、放置されればたちまち医療保障から外される可能性がある状態を示しているといつて良いでしょう。

ここであらためて「安全確認のための戸別訪問」への願いと「医療機関への送迎」の要望を重ねて考えてみますと、病気がちで経済的な困難を抱えている人たちの「見捨てないでくれ!」という心の叫びではないかと思えてきます。この二つの項目の回答数を合わせると「総数」のうちの110人、22.2%に達します。

「羽田報告」が、2009年から立川圏域で始められた送迎サービスの利用者が急増しているとありますが、それはそのまま公共的な社会保障政策の緊急課題を示しているのではないのでしょうか。

◆第4位は「健康講座」だった

要望の第4位は「健康講座」でした。この要望は主体的・積極的な願いですが、「総数」で47人、9.5%がこれを求めており、性別では男性の要望が強いことがうかがわれます。地域別に見ると、青梅奥多摩支部で比率が高く(13.1%)、「安全確認」や「送迎」よりも強い要望になっていることが目に付きます。もしかすると、健康教育についてのこの地域の公共的なプランが不十分かもしれず、調べてみる必要があるでしょう。

◆「配食」への願いが第5位に

「配食サービス」を望む声は、「総数」で33人、6.7%でした。これも軽視できない数字です。立川市を例にとると、2011年1月の65歳以上人口は約3万5500人、その6.7%なら2370人以上に達します。いうまでもなく「食」は、生命・健康に直結する文字通りの基本的な課題であり、「配食」への要望が独居や経済的困難と結びついている可能性もあります。さらに掘り下げた実態調査が求められるテーマです。

◆第6位は「相談窓口」がほしい

第6位は「暮らしの相談窓口」を求める声でした。「総数」の28人、5.6%がこれを要望しています。暮らしの相談ですから、生活の全般にわたる「何でも相談」というイメージだと思いますが、実際にはたいへんに少ないのが現状です。行政が行っているのは、それぞれの専門分野ごとの相談事業が多く、なんでも受け止めてくれる相談にはなりませんし、交通の利便性からみた地理的困難があることも考えられます。「たまり場」への要求とも結びつけて、行政への施策要求としても重要なテーマと見るべきだと思われます。

◆第7位に「趣味の講座」が

「趣味の講座」を求める回答が第7位でした。「総数」で25人、5.0%がこれを願っています。「趣味の講座」というと、ゼイタクと思われる人がいるかもしれませんが、「生涯学習」は憲法・教育基本法に書かれた基本的人権であり、健康論からみても重要なテーマです。

表E 日常生活についての満足度 %

調査年	満足	まあ満足	やや不満	不満
2009	26.4	55.5	13.3	4.7
2004	24.6	57.9	13.6	3.8
1999	27.2	58.5	11.7	2.5

表F 将来の日常生活への不安 %

調査年	とても不安	多少不安	不安なし
2009	15.6	56.3	28.1
2004	14.1	53.8	32.1
1999	10.8	52.8	36.4

◆全体的に何を受け取るか

以上、三多摩健康友の会のアンケートから「友の会の活動への期待」についての結果を分析しながら、高齢者の生活要求について考えてきましたが、全体的に見えることとして、次の点を指摘しておきたいと思います。

①きびしさ増す生活環境

まず、高齢者の生活環境の悪化が進んでいると思われることです。羽田報告では、アンケートの中の「収入状況」などの回答結果から生活困難を指摘していますが、ここで示した「安全確認」「医療送迎」「配食」「相談窓口」への要望のいずれも、生活的危機のあらわれと見るべきでしょう。

②主体的・積極的に生きる姿

しかし高齢者が受身だけで生きているのではないこともよく分かります。トップ要求の「たまり場」や「健康講座」「趣味の講座」への願いが、そのことを示しています。これら3項目の回答者を合わせると32.4%に達しますが、ここには「生涯現役」を願い、社会参加を求める高齢者の姿が映し出されています。

◆広がる不満と不安——直面している現実

さいごに政府の統計(高齢者の日常生活に関する意識調査=対象は60歳以上)から3つのデータを示しておきます。表Eは日常生活の不満の拡大、表Fは将来への不安の増大を示し、表Gは高齢者夫婦(または単身高齢者)の60%近くが年収300万円未満、27.3%が180万円未満であることを示しています。

健康友の会のアンケート結果は、こうした現実の上に立っているのです。 <多摩研・研究員室>

表G 高齢者夫婦(または単身高齢者)の収入

収入段階(万円)		構成比(%)	
月額	年額	段階別	積算比
無収入		1.1	1.1
5未満	60未満	3.3	4.4
5~10未満	60~120未満	10.2	14.6
10~15未満	120~180未満	12.7	27.3
15~20未満	180~240未満	15.1	42.4
20~25未満	240~300未満	16.4	58.8
25~30未満	300~360未満	13.0	71.8
30~40未満	360~480未満	9.7	81.5
40~60未満	480~720未満	7.3	88.8
60~80未満	720~960未満	1.7	90.5
80以上	960以上	2.5	93.0
無回答		7.1	—